

## シラバス

進路指導はこれまで「出口の指導」「選別・斡旋へと偏重」と問題が長いこと指摘されてきたが、十分な改善や方策立案に至っていない。そもそも児童・生徒にとって進路・職業はどのような意味をもつのか検証し、支援のあり方を検討する。

## はじめに

進路選択の問題は、児童期・青年期のさまざまな課題が関わり、複雑だが研究しがいのあるテーマ  
学業成績、社会認識、性役割意識、自己評価、自己像、親子関係、学校適応など

∴子ども・若者のさまざまな課題が進路選択に影響し…

また進路選択がさまざまな課題を難しく、悩ましいものになっている、という実態

＝研究するには要因が多く、しかしそれを少しずつ解き明かしていく醍醐味も

＝同時に、進路選択の側面からそれぞれの教育課題が見えてくることにも

他方、教育現場では進路＝卒業後のこと、本人（と保護者）の責で決めること…となおざりに

確かに完全に学校（教師）主導で決めたら責任をとりきれない、“正解”があるわけでもない

cf.) 1990年代初めの埼玉県で業者テストの偏差値に基づいた私立中学校の青田刈り

それでも学校教育の一環として学校が指導し、卒業後の進路に繋ぐことになっている

**進路保障**という考え方（資料1）

個性の理解、職業・上級学校の理解、就職・進学についての知識、将来の生活における適応についての理解

→学校がそれらを支援して自主的に進路を選択決定する能力を養う

## 第1時限 進路指導の課題と「進路を選ぶ」

中学・高校における進路指導

「どこを受けるか」「それで受かるか」という斡旋が中心（「出口の指導」）cf.) ミカン農家、不動産屋さん

∴「自分の成績で受かる、最もランクの高い学校へ」

→「行きたい学校より行ける学校」？（合格至上主義）

「教育学部や理学部では“もったいない”」？（偏差値・ブランド志向）

←基準の画一化・硬直化、合格・入学だけが目標に（本来は実現したいこと的手段）

→本来なら「自分の個性を知り、選択肢を探索・吟味させ、将来の生き方を考えさせる」

∴広い範囲からの選択ができれば…軌道修正もできる、自身の選択肢を**相対化**できる

選択肢を絞り、深く調べることで、進路先での適応の備えに

cf.) realistic job preview：セルフ・スクリーニング効果、コミットメント効果、ワクチン効果

個性・生き方まで考えることで…**人格発達**の契機に（時間的展望、社会を知る など）

+成績ランクだけで優劣をつけない多様な見方・考え方をもたせたい

（職業への貴賤意識の払拭、「成績の良さ＝人間の価値」観の懐柔）

→選ぶ前だけでなく、本来であれば「その後の適応を支援する指導も」

∴次のステージの進路に適応するには選択時点の生徒の認識や技量を高める必要あり

※卒業後のアフターフォローは理想的には存在：進路指導の第6の仕事「**追指導**」

なぜ斡旋中心の指導に終わるか

- ・関わる全ての担任教員に進路指導の専門性は期待できない & 大学の教職課程でも無理がある
- ・教員自身もそのような指導しか受けてこなかった
- ・合格させるための指導それ自体は重要（**進路保障**）
- ・「良い学校」「良い就職先」への合格実績が学校の評価・体面と関わってしまっている  
→ “良い” とは何か？ cf.) 「なんで私が京大へ」
- ・保護者からの期待も「良い学校」「良い就職先」

- 反・偏差値、反ブランド志向の進路指導には保護者が“抵抗勢力”に
  - ・民間の感覚や時代の変化に学校教員はついていきにくく、保守的・旧態依然になりがち
  - ・教員の多忙さ→世の中の出来事についていけない
  - ・「学校はつぶれない」：お客（子ども）は何があっても毎日やってくる
  - ・「良い学校から良い就職先へ」にはほころびが生じている近年の動向を実感していない
- グローバル経済、変化が激しい社会

そもそも「進路 (career)」とは

「進学先」「就職先」のことと思われるが、本来は「人生のさまざまな役割の果たし方」

D. E. スーパー Life Career Rainbow (資料2)

→「働く」役割は、それ以外の役割の果たし方と制約し合う

時間的に先行する役割は、それ以降の役割の果たし方に影響する (cf.)原義は「轍」

∴「進学先」「就職先」を単独で考えてはいけない

「<sup>career</sup>進路選択は生き方の選択」といわれるゆえん

「進学先」「就職先」どちらも、いろいろな他のことが付いてくる (cf.)「結婚」も

通学（通勤）時間の長さ、つきあう人たち、暮らす土地、休みの取れ具合、その後の進路…

中学生・高校生にとっては…

- ・進学先（・就職先）のブランドや学習（仕事）内容以外に考えるべきことがある

どういふ毎日を送ることになるか、その後の進路は

- ・進路先での役割の果たし方次第で、充実もするし無為な日々にもなる

何に熱中する（エネルギーを注ぐ）か、どんな力を付けるか、その後どうするか

→だから成績だけで（ブランドに目を奪われて）進学先を選ぶのはリスクが大きい

※ただし中学・高校生にとって「生き方」といってもピンとこない

∴「**学び方・過ごし方**」という言い換えを推奨；そんな遠い先の話だけが問題ではない

部活動が続けるか、どの友だちとどうつきあうか、何にお金を使うか等も「進路」の問題

※進学後のことまで考えられない？→そこまで調べ、考えるから**人格の発達**につながる

→「自分の個性を知り、選択肢を探索・吟味し、将来の生き方を考える」過程が必要

人間にとって「進路」のもつ意味を考える

狭い意味での「進路」について：どの学校に進学し、どんな職業・会社を選ぶか

それらの進路はときに「自分はどんな人間か」（についての評価）を形づくる

例1) What are you? (あなたは何の仕事をしていますか)

…仕事・職業が「あなたが何者であるか」に大きな位置を占める

同時に、「自分はどんな人間か」「どんな人間でいたいか」を職業や進学先と整合させたい

例2)「こんなバカが通う学校になんて行ってられるか」

…学校の評価がその人の自己像と合わないゆえの嫌悪感

cf.)「職業選択とは自己概念を職業名に翻訳すること」(D. E. Super)

また職業はその人の人生の半分近くを占める

…実質的に人生の「中身」を決める+波及的に影響を受けて変わる生き方=広義の「進路」

広い意味での「進路」(生き方・学び方・過ごし方)では：

ある選択は同時期の他の選択やその後の選択に影響する

例) 部活動が続けるか否か →勉強や趣味に割ける時間やエネルギー量 →難関校に進学するか

ある友人と仲良くするか →行動範囲や行動原理に影響 →何に価値を置く生き方になるか

∴進路選択=どんな生き方をしたいか

→したがって人によって「良い選択」は異なるが…「良い進路選択」とは何だろうか？

→「良い選択」のための成長について、「キャリア発達」という概念がある

進路選択に伴う人格の発達

進路指導の目標となる概念「**キャリア発達**」

①社会の中で自分の役割を果たしながら

②自分らしい生き方を実現していく過程

→この二者はさまざまな意味で対になっている

集団 vs 個人 義務・貢献 vs 個性・実存 年齢・立場 vs こだわり

→集団・社会の側面と個人の側面のそれぞれにおいて高めていく必要がある

∴①が社会への適応には重要だが、②がないと自分に合わない、意欲が高まらない

職業の文脈では②だけでは身勝手な仕事ぶりに；①だけでは職場が発展しない

言わば①は社会から求められるもの、②は自分から求めたいもの、という両面

→進路への適応にも満足にもこの両面が求められる

「発達」とは「年齢による経年変化（のすべて）」

∴小さい子どもから老年期までそれぞれに課題がある

→小さい子（例：幼稚園児）でも家庭内・園内ですべきこと（①）があり…

同時に自分の好きなもの・好きなことを見つけて、「大人になったら…になりたい」（②）

→働き始めてからも経験年数や職階に応じた①があり…

例）親の介護のために仕事を制限する、初任→中堅→リーダーと期待される役目に変化

②も環境や役割の変化に応じて、実現したい自分らしい生き方を見直していくと良い

例）初任から中堅教員までは部活顧問として頑張り、それ以降は教員のリーダーとして

②の側面としてカギになる概念がアイデンティティ（同一性）

「私はどんな人間か」に関する自覚・自信・自尊心・責任感・使命感・生きがい感

∴進学先・就職先の選択→その他の役割・その後の役割の果たし方にも悔いを残さないように

→そのためには「自分はどんな人間か、どう生きたいか」をはっきりさせておく必要がある

E. H. エリクソンによると青年期の発達主題がこれ《アイデンティティの確立 対 拡散》

これなしの選択は他者による（規範的な）価値にのみ沿ったものになる

例）高校に何をしに進学するか vs 高校へは必ず行くものだから進学する

cf.) 資料3 「『有用有急』の探検 帰国し異議問われこちらがびっくり」

厳密な定義：内的な不変性と連続性を維持する個人の能力が、他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信（Erikson, 1959）

→不変性：「自分は他の誰とも違う自分で、一人しかいない」

連続性：「今までの私もこれからの私もずっとこの私」

私が思うものと  
他人が見てくれる  
ものが一致

児童期までは自己認知能力が未発達のために気にならないが…

思春期になると自分〔自我〕が自分〔自己〕のあり方を見られるようになり…

今までの自分や今の自分が自分と思えなくなったり…

誰かの意向に背かないようにしている自分に嫌気がさしたり…

（自我から見える自己がそれまでの自分と同一とは思えなくなる）

アイデンティティが  
揺らぎ、もがく

∴「どのような進路を選ぶか」は自己のアイデンティティとすり合わせて考えたい

進路選択を通してアイデンティティを次第に確立させることが人格の発達につながる

ただし進路＝職業ではないので、職業でアイデンティティを実現させなくともよい

## 第2時限 理念的な進路指導を実現させるキャリア教育

学校間の移行・接続がうまくいっていない：進路指導が十分に機能していないことのひとつのあらわれ

小1プロブレム (cf. ジコチュー児 (1998))、中1ギャップ、高1クライシス

高校中退者の多さ (90年代で11万人)、不登校者率が中学校で急増

学校から社会への移行も問題視されていた

高止まりする早期離職率 (七五三問題)

選択にもミスマッチが目立つ

フリーター、ニートの増加 ※ただし雇用制度や産業構造にも原因あり

そんな折、中教審答申 (1999) がキャリア教育の必要性を示す (「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」)

主な指摘①高校・大学は「とりあえず進学するもの」となり、非主体的なものに

②少子化から入試が厳しくなくなり、勉学意欲が低下

→進学する生徒・学生が多様 (無気力や能力の不足など適応できない生徒の存在) になった

③「学校歴」の獲得競争に終始している

④反面、企業等ではそれは軽んじられ…

重視されるのは熱意・意欲、協調性・バランス感覚、創造性+専門的知識

→これらは働き始めてからでなく、どこに行っても適応のために必要な汎用的な力

※今の学校や進学先においても

⑤変化が速い社会にあって、幅広い視野から物事を捉える必要がある

⑥現状の子ども・若者は社会生活の基本知識が欠如し、倫理観も希薄、人間関係形成が困難

→進路指導が適応の力をつけることに重きを置いてこなかったことが問題

※そもそも卒業後への視点がないことに加えて、汎用的な力を重視していなかった

そもそも進路指導の目標が (①や③に見るように) 曖昧だった (とりあえず送り出せば、という発想)

そこで学校と社会および学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育を提言 (2004年)

その定義：一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、

キャリア発達を促す教育 ※2011年の中教審答申におけるもの

※キャリア教育の定義にキャリア発達の意味を統合した次のような定義文もある

「子どもたちが社会の一員としての役割を果たすとともに、それぞれの個性、持ち味を最大限発揮しながら、自立して生きていくために必要な能力や態度を育てる教育」

特筆点1 最終的な目標を社会的・職業的自立におく ←ここに向けてキャリア発達を促すと明記

【留意点】職業的自立は比較的わかりやすいが「社会的自立」は曖昧…十分に定義づけられていない

キャリア発達の2つの観点のいずれも含ませて考えるべき

①社会の中で自分の役割を果たしながら…周囲の環境に適応/他者との協同・協調

②自分らしい生き方を実現する…自分らしい役割の果たし方を確立

特筆点2 必要な基盤となる能力や態度の育成

答申の前後から各省庁等が「〇〇力」を提唱していた (資料4参照)

キャリア教育においても4つの基礎的・汎用的能力を中心とした能力・態度を提言 (資料5参照)

※「訓練によって習熟していく」という育成の姿勢を込めたもの。「ない子は切り捨てる」ではない

特筆点3 職業教育との区別や「基礎的・基本的な知識や技能」との関係を明確にした (資料5参照)

キャリア教育は幼児教育期から基礎的・汎用的能力を育てることを通してキャリア発達を促す

幼児期でも例えば人間形成・社会形成の力や自己理解・自己管理の力は日々、育てられている

進路指導とは理念として同じだが、キャリア教育は進路指導の基盤をつくる位置づけ (資料5参照)

特筆点4 キャリア教育の定義は生徒指導の定義と多くの点で重なる

生徒指導とは、一人一人の児童生徒の…個性の伸長を図りながら、社会的な資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことです。各学校においては、…自己指導能力の育成を目指すという積極的な意義を踏まえ…。 (文部科学省『生徒指導提要』, 2010年)

→キャリア教育は、単なる進路指導の拡張ではなく、人格の発達全体を支援する営みと言える

キャリア教育の意義（2011年の中教審答申より）

1.第一に、キャリア教育は、一人一人のキャリアの発達や個人としての自立を促す視点から、**学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである**。各学校が、この視点に立って教育の在り方を幅広く見直すことにより、教職員に教育の理念と進むべき方向が共有されると共に、教育課程の改善が促進される。

→キャリア教育は領域論でなく**機能論**（特定の内容を指し示さない；あらゆる活動がキャリア教育）

∴あらゆる教育がキャリア教育になりうる

例）グループワークや清掃活動で人間関係形成・社会形成能力を養う

2.第二に、キャリア教育は、将来、社会人・職業人として自立していくために**発達させるべき能力や態度があるという前提**にたつて、各学校段階で取り組むべき発達課題を明らかにし、日々の教育活動を通して達成させることを目指すものである。このような視点に立って教育活動を展開することにより、学校教育が**目指す全人的成長・発達を促す**ことができる。

→小学校、中学校におけるキャリア発達の課題が明示されている（資料6）

狭義の進路、職業と直接関わらない、人格の発達を意図した課題が列挙されている

3.第三に、キャリア教育を実践し、**学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け**、将来の夢と学業を結びつけることにより、生徒・学生たちの**学習意欲を喚起**することの大切さが確認できる。このような取組を進めることを通じて、学校教育が抱える様々な課題への対処に活路を開くことにもつながるものと考えられる。

※（ここまでの説明にはなかったが）キャリア教育では上記の「学びと社会・職業生活との関連づけ」も重要な眼目とされている。それは国際調査にて、日本では「成績は良いが、興味も自信も将来との関連の認識も低い」という結果（資料7）が出ており、受験で無理矢理勉強させられている姿が浮き彫りになったため。「せっかく付いた学力が剥落する」と問題視された。確かにそういう学びでは、社会的・職業的自立につながる「学び方・過ごし方」にはなっていない。

→確かに人はめざしたい目標が見つかるとそのために努力する動機づけは大きい（資料8）

ここまで説明してきたキャリア教育を図示すると、資料9のようになる

→確かに学校教育がキャリア教育を意識して進められれば、進路選択や適応は改善されるだろう

ただ反面、下記の検討点が挙げられる

#### 【検討点】

- 1) 民間企業側から求められる能力・態度を、学校が育成する課題として考えるべきか？
- 2) 社会への適応が難しいのは産業・雇用・労働環境の問題でもある。なのに「本人側の能力や態度」を高めて乗り切れというのか？
- 3) 「〇〇力」という力の存在を仮定することは適切か。「～できるか」は「何に対してか」と切り離して静的に存在しないのでは？ 例）記憶力、創造力、課題解決力